

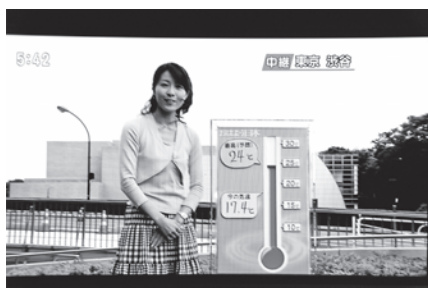
ずいそう 天気予報の現場より ～気象キャスターの舞台裏～



瀧岡友美

はじめまして。気象予報士の瀧岡友美です。NHKの朝のニュース番組「おはよう日本」で、平日の気象キャスターを務めています。担当してことして2年目。まだまだ駆け出しです。

平日の「おはよう日本」は、毎朝4時30分から始まります。その中で放送される、朝一番の気象情報。それが私の最初の仕事です。日本全国の天気から世界の天気まで、スタジオで気象解説をします。その後、5・6時台はスタジオを飛び出してNHK放送センター前からの天気中継へ。中継は合計3回。スタジオとちがって、外の空気を実感しながら伝えられるのが魅力です。傘や服装、洗濯情報など、生活に役立つ情報も盛り込むようにしています。朝の番組を担当し始めて、よく受ける質問のダントツ1位は「一体、何時に起きているの?」。答えは「午前1時」です。以前はこの時間は就寝していましたから、まさに昼夜逆転です。起きて、軽い朝食（正確には深夜食でしょうか）を食べたら、2時半に局入り。ここからは、もう立ち止まる時間はありません。放送用の衣装に着替え、メイクを済ませたら、3時過ぎから放送の打ち合わせです。天気図や資料に目を通し、その日の天気のポイントを決めたり、放送に使う画面を選んだり。予報の組み立てや話の内容なども、自分で考えます。基本的に、原稿は書きません。暗記するのは大変ですが、原稿を読むよりも自然に話すことができ、視聴者の方々に伝わる気がします。そうしているうちに、気づくと放送開始の数分前。あわただしい毎朝です。



渋谷のNHK放送センター前からの中継

ところで、私が気象に興味を持つようになったのは、NHK前橋放送局で取材リポーターの仕事の始めたのがきっかけです。平成16年当時、群馬県内のさまざまな話題を追って、あちこちを取材しました。中でも、農家を訪問することが多く、多くの生産者の方々に出会いました。そんな中、皆さんが口々に話していたのが「気象情報を頼りにしている」という言葉です。天気や気温の予報をみて、必要な対策をとったり、先手をうって作業をしたり。気象情報がこんなにも生

活に根付いているのだと驚きました。実際、お世話になった方の畑にひょうが降り、野菜がダメになってしまったこともありました。もし、ひょうが降る気象条件（大気の状態が不安定で、積乱雲が急速に発達するケース）だということを少しでも早く伝えられていれば、被害を軽減できたかもしれません。気象が災害に大きく影響することは、知識としては知っていましたが、生活や仕事に深く結びついた気象情報の大切さに、あらためて気づかされた思いでした。

いま、実際に担当してみても思うことは、全国の天気予報の難しさです。日本列島の天気は、地域ごとによって全然ちがいます。それを1～2分の放送で伝えるためには、いかにポイントを明確にするかが肝心です。専門的な言葉をなるべく省き、思い切って情報をそぎ落とすこともあります。また、放送においては、気象予報士としてだけでなく、伝え手としての表現力も求められます。例えば、「雨が降っている」といっても、どんな雨なのか。どんな降り方なのか。オンエア直前まで適切な言葉を必死に探しては、表現を練る作業と格闘する毎日です。もちろん、喜びもあります。視聴者の方から頂くお手紙は、何よりの励みです。落ち込んだときもファイトがわいてきます。

<出前授業>

また、放送とは別に、小学校に向いて出前授業を行うこともあります。これが、とても新鮮で楽しい時間です。天気や温暖化などについての話や実験をするのですが、子供たちのキラキラとした瞳に私のほうが元気付けられます。少しでも自然環境や気象に興味を持ってもらうためにも、こうした活動は続けていきたいと思っています。

最近では、ごく短い時間でも災害を引き起こす激しい雨や雷雨など、これまでになかったような天気が増えています。温暖化の影響もあり、世界的にも集中豪雨の増加や台風の規模の強大化が報告されています。これからの気象予報士の役割は、ますます重大です。四季の移ろいを大切にする心を忘れず、天気の変化に気づく嗅覚を磨き、防災情報を的確にお伝えしていきたいと思っています。

